私の思いがこもった黒帯

一宮東部小・6　竹野　新知花

「赤、二番竹野選手。」
「青、三番〇〇選手。」
組み手の試合が始まる。親の声と、同じ道場の子の声と、私のきんちょうがコートに広がっていく。相手は相当強い。しかも前回の試合では、この子に負けている。また負けてくやしい思いをしたくない。
「勝負、始め！」
試合と言っても、いつも通りにするだけ。練習でやってきたことを、ここで全部出す。そう自分に言い聞かせ、自分の心を落ち着かせる。相手はとても速いけりを連続で入れてくる。そのけりを私は手でなんとかさばく。残り十五秒。今は三対〇で勝っている。相手はあせって走るように飛びかかってくる。絶対に負けたくない。勝って一位になりたい。私はそのことを思って戦った。
「ピー。」
試合終りょうの音が鳴った。結果は三対〇で勝った。相手はくやしそうにしている。私はうれしくて、
「やった。」
と思い、飛びはねたいところだった。けれど、ここは冷静に。メニホーの下でにやりとだけ笑って、うれしい気落ちを心の中でばく発させた。
空手を始めて四年が経った。私と空手の出会いは、小学校二年生の時だった。空手の見学会で、体育館の外まで聞こえる大きな子供の声と先生のきびしい声、その中で一生けん命にけい古している姿を見て、
「かっこいい。私もこんな風になりたい。」
と思い、空手を始めた。
空手を始めたばかりのころは、夏でとても暑く、練習がつらかった。けがやあざも多く、痛い思いもたくさんした。初めて出場した大会で、準優勝をして、やる気にさらに火がついた。それからは、暑い夏も寒くてふるえる冬も一生けん命練習にはげむようになった。
私には、一しょに空手を始めた友達がいる。友達がいるからこそ、つらい練習もがんばることができるし、一人ではくじけそうになるときも、おたがいにはげまし合うことができた。友達がいることは、私の支えとなっている。
他にも、私を支えてくれている人は、母だ。毎回の送げいや応えん、いろいろなところで母は私を助けてくれる。母にも友達にも、感謝の気持ちでいっぱいだ。
今、私は黒帯だ。黒帯になるにはとてもきびしい練習と名古屋でのしょう段検定で合格しなければならない。
四月の始め、私はこれが受かれば黒帯だと思い、興ふんしていた。けれど、しょう段検定はそれほどあまくはなかった。おそろしい顔をした他の道場の先生。険しい顔をしてこちらを見ているしん査員。道場の空気は息がつまるほど重く、静まり返っていた。
「もっと声を出せ、黒帯になりたいんじゃないのか。」
と、先生の大声がひびきわたる。とてもこわい。わたしは、心配が大きくなり、さっきまでの興ふんしたきもちはどこかへ消えてしま

った。
　不安な気持ちのまま、ついに私の番が来た。心臓が止まりそうだったけれど、やれることをやろうという気持ちで、全てやりきった。
　しん査の時間がとても長く感じた。どうしても受かりたい。友達に置いて行かれたくない。一人だけ落ちたら・・・。とてもこわくて心配で苦しくなった。
「竹野新知花さん、合格です。」
　その言葉で、心配やきょうふは飛んで行った。私は、ぴかぴかの黒帯をしばった。黒帯がかがやいて見えた。今までがんばってきて本当によかったと思った。つらかったことや楽しかったことを一気に思い出した。今までの全てを黒帯の中に入れて、これからも練習にはげんでいきたい。
　私は、空手を通じて、
「自分に強い人」
になりたい。周りの人への感謝の気持ちを忘れず、自分の進むべき道を自分で切り開き、自分の意志でつき進むことができるような強い人になれるように、これからも練習を続けていきたい。　７・９